

【講評文】 8月10日（水） 6校目

「月が遠い」 大垣西高校

劇中劇と現実の物語が様々な部分でリンクしているため、その差をどう表現するかという部分がこの演目を行う上での大きな課題であったと思います。しかし、音響照明を含めて様々な部分で工夫されており、暗転も少なく短いため、次へ次へと物語が進行していき、観客は最後まで飽きることなく見入ることができる公演でした。

登場人物が多く、舞台上に全員が出てくるシーンが多くある中でも、キャストの表現力の高さで全員の役作りがしっかりとされていることで、誰が誰なのか観客側もすぐに理解することができました。

現実の空気が悪くなっていくにつれて、劇中劇では月の空気が薄くなり、登場人物の性格や心情のリンクが細かいところまでしっかりと描写されているため、観客側も気付かぬうちに感情移入して物語に引き込まれていってしまう演技になっていたと思います。

衣装に関してもそれぞれの特徴やパーソナルカラーがよく分かるように考えられており、物語が進行するにつれて衣装を着る人が増えていくなど、実際に作品を創っていく中での細かい演出はとても魅力的だと感じました。

また、照明が劇中劇と現実の物語との差を出すために使われていましたが、暗転はせず現実の物語の進行から自然と入れ替わるような形で利用されており、そういった部分でも劇中劇と現実の物語が大きくリンクしていることを感じることができました。

装置に関しては、劇中劇では自由な生活空間、現実では学校の一空間という感じが出ており、配置を特に変えることをしていないのに、様々な空間として見ることでとても良かったと思います。奥にある4本の柱が最後は扉のついた宇宙船になるという発想もとても面白い使い方だと感じました。

ここで描かれる「月の世界」とは、私たちの理想の世界であり現実の向かう先でもあって、近づけば近づくほど気分は楽になり楽しく自由でいられる場所なのですが、変化を求めたり、向上心が生まれれば、永遠にそこにとどまることはできないという葛藤も同居した世界であるように感じられます。私達もそれに向き合って受け入れていかなければいけないという、高校生である私たちは特に深く考えさせられる公演でした。

大垣西高等学校のみなさん、上演お疲れさまでした。

(文責 岐阜各務野高等学校 2年 大墨琴音)